

子ども時代の「他者との時間」に関する人間学的考察

有馬 知江美¹

1. はじめに

「子どもの時間」は「大人の時間」と異なるものである。幼い子どもが過ごす「子どもの時間」を早急に「大人の時間」に近づけようとするのではなく、人間形成における「子どもの時間」の自律的価値を認め、幼い子どもたちが「子どもの時間」を十全に過ごすことが不可欠であることはすでに拙稿で論じた通りである¹。

「子どもの時間」とは、子どもが自分自身の直観を通して対象世界に関わる時間である。したがって、子どもが「子どもの時間」を十全に過ごすことは、対象世界を豊かに捉える彼らのまなざしを育成する端緒となる。換言すれば、子どもが自分自身の独自の目を持ち、独自の世界を構築するために、人間形成において「子どもの時間」が不可欠であるといえることができる。

独自のまなざしを持つ者は、その自律性から、他者に迎合したり同調したりすることなく、対象世界への批判的な見方を生起させる。対象世界への批判的な見方は、既存価値への追従や迎合を忌避し、文化の貧困化をもたらす事柄の平準化や画一化を否定する。したがって、独自のまなざしを

¹白鷗大学教育学部
e-mail : arima@fc.hakuoh.ac.jp

持つ者は自立した文化創造者となりうるのである。こうした者が互いに交わることによって、自律的でかつ生の充溢した文化が形成されていくこととなる。

ここから、子どもたちが幼い子ども時代に「子どもの時間」を十全に生きることが、やがて他者と共に豊かな文化創造をなすための礎を築く時間として考えられうるのである。

なお、幼い子どもがなす対象世界を全体的に見ようとする直観的な理解は、やがて言語に基づいた概念的理解に移行していくが、それは子どもの就学が契機となっている。換言すれば、「子どもの時間」は就学を機に「学校の時間」に漸次転換されていく。こうした観点から本稿では、「子どもの時間」を主に就学前の乳幼児期の子どもが過ごす時間として捉えるものとする。

さて、「子どもの時間」は独自の自由なまなざしを通して対象世界に関係するという点で、極めて孤独な時間であることはすでに拙稿で論じた通りである²。子どもが遊戯において一人遊びに興じる姿は、遊戯が充溢する「子どもの時間」における彼らの孤独 (solitude) を示している。それは、他者から排斥された結果としての孤立 (loneliness) ではなく、彼らの遊戯が導き出す孤独である。人は本質的には孤独となることを通して自分自身と向き合う契機を得るのであり、孤独であることは創造的活動に不可欠である³。また、こうした孤独の時間は、子ども時代を経てもなお、その後の人生において人が自分自身の自由なあり方を探究するにあたり志向し続けるべき時間であるという点で、子ども時代に限定されない。したがって、子ども時代における孤独の時間は、生涯にわたる私たちの自由の探求の契機となり、極めて重要な時間なのである。

もっとも、上記のようなとらわれのない自由なあり方を人が探究しようとする際、単なる独我論にとどまってしまうという危うさがあることは否めない。孤独と孤立の相違に盲目的となり、自己以外の者を排斥して孤立を享受することが、すなわち人間の自由であるという曲解が時としてなさ

れるのである。しかしながら、自由の探求とは、単なる内省的な次元においてその成否が決定される自己完結的なものではなく、常に自己と自己以外の者との関係性のうちで実現される。ボルノー（Otto Friedrich Bollnow: 1903-1991）が、一切の現実的な生は、孤立して存在する者によっては捉えることができないとして、人と人との出会い（Begegnung）が私たちに要請されていると指摘する⁴ように、他の人間の生との出会いと交わりにおいて個々の生のあり方が探究される。このことは一見すると自己矛盾を抱えているように見えるものの、孤独な主体が同様に孤独である自己以外の者とのなんらかの関わりをなすという孤独者同士の関係性において、個々の自由は実現しうる。

こうして、主体と他者との関係性を内在させた孤独に関する考察が、自由の探求を本質的に内在させている子どもの時間論を単なる独我論を越えたものとして明らかにしうるということが考えられるのである。

本稿では「子どもの時間」の孤独性をすでに拙稿で論じている⁵ことを踏まえ、「子どもの時間」が「孤独の時間」と同時に「他者との時間」をも包含していることに注目したいのである。「子どもの時間」における「孤独の時間」と重層的に存在する「他者との時間」をめぐり、子ども時代において他者と共に過ごす時間の意義を考察するものとする。

2. 自己と拮抗する「他者」の存在意義

齋藤昭によれば、自己以外の存在は、直接的な関係のない存在としての「他人」（der Fremde）として現前する場合と、直接的に「私」と関係を持つ「他者」（der Andere）として現前する場合がある⁶。その人間関係の浅深により両者は区別されている。さらに齋藤は、相手と人格的な対話的交渉の関係になりうる存在として直接性を深化した存在を「汝」（Du）としているが、「私」とは不可動・不可逆で交換不可能な関係であるという点では「汝」も「他者」に包含されるという。こうして「他人」は、人格と人格との交わりを経て「他者」となりうるのである。

こうした人格の交わりを内在させた「他者」は、以下のようなある種の厄介さを起因として避けられる傾向にあり、人間関係は「他人」同士として留保されやすい。他人から他者への人間関係の移行を人に躊躇させる要因とは、いみじくもヤスパース（Karl Jaspers：1883-1969）が述べた「闘いながらの愛」（die kämpfende Liebe）⁷である。

すなわち、「闘いながらの愛」が介在する二者の関係のうちでは双方の安易な妥協や服従ではなく、真摯な拮抗が見られるのであるが、両者が相互に尊重しあいながらも抵抗しようというこうした特殊な関係性は、人に受け入れられにくいのである。それは、表層的な同調や互いへの追従及び迎合という姿勢に甘んじることの方が、不要な葛藤をもたらさないという点で容易であるからである。

しかしながら二者の真摯な拮抗は、互いがとらわれのない自由な存在として自分自身を他者に対決させることを通して、自らの真正性を問う契機を得ることができるという点で不可欠なものである。すなわち、こうした拮抗においては、自己に侵犯してくる異質な存在に果敢にまなざしを向けることによって、侵犯してくるものと自己とを照らし合わせる作業が付随するのである。換言すれば、そうした自他の照合において、「今の私でよいのか」という自己否定を含んだ問いを自らに向けるという自己検証が不可欠となる。したがって、他者との拮抗は、現在の自己のあり方に対する批判的問いを内在させながら自己の真正性を問うという自己との闘いをも自分自身に課すのである。

こうして、自他との厳しい闘いをも潜在させた自己と他者との真の関係性は、人間形成において自他のあり方を問うという点において果敢に引き受けなければならないものであることが知られるのである。

なお、上記は幼い子どもたちにも同様であり、拮抗を余儀なくさせる「他者」の存在が不可欠である。そうした「他者」と過ごす時間が「子どもの時間」に内在する時、「子どもの時間」は独我論を越えるのである。子どもたちが自由な自己を見出し、さらには自由な他者と共に文化創造をなすた

めには、彼らもまた以上のような拮抗を内在させた特殊な関係性を引き受けなければならないのである。こうした観点から、子ども時代の「他者との時間」の論究が求められるのである。

3. 乳幼児期に会う「他者」

(1) 「他者」の同心円的な広がり

それでは、幼い子どもたちが、「子どもの時間」において会える「他者」とはいかなるものなのであろうか。

乳幼児期の子どもにとって最も身近な他者は母親である。母親は自身の胎内での約10か月にわたる妊娠期間や出産において我が子と極めて直接的な身体接触を経験しており、さらに、出産後も授乳等を通じてそれが継続するという点で、子どもにとって最も身近な他者であることに相違ない。

しかしながら、母子関係にはこうした空間的な同化に近い関係性がみられる一方で、両者間には時間的な相違が顕著である。母親の胎内にいる胎児でさえも母親の睡眠のリズムとの相違が指摘されるように、両者の時間の流れは異なっている。誕生後はそれはさらに顕著となり、母親による様々な育児ストレスの根源には両者の時間的相違があるとさえ言うてよいであろう。両者は明らかに時間的他者として留保されているのであり、家という同一空間において相互に「他者の時間」を体感することとなる。

こうして、妊娠中のみならず、出産後に至っても子どもと身体接触を日常的になす母親は、胎児を自らに内包した経験や出産後の授乳という身体接触の継続的経験を通して、子どもとの空間的共有をなしながらも、一方では、両者間の時間的乖離を引き受けなければならないというアンビバレントな関係に生きることを不可避的なものとする。そして、この両者の関係性は、母親と同様に育児を担おうとする父親には全面的には経験できないものであり、母子間独自のものといっても過言ではない。

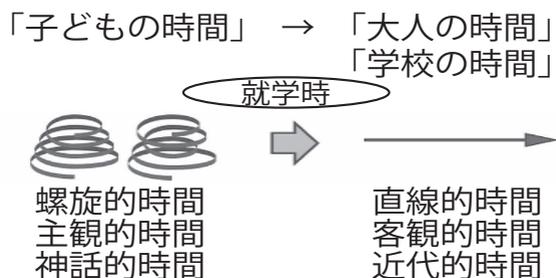
なお、以上のような時間の相違とは、睡眠や食事等をめぐる生物学的及び生理学的な時間の相違に基づいているのと同時に、他方では、「子ども

の時間」と「大人の時間」の相違として現れている。保護者は「大人の時間」に生きる者であり、「大人の時間」から身を乗り出すようにして子どもと関わっていることが多いのである。

多くの大人が生きる「大人の時間」とは、近代的時間ということが出来る。それは主観的時間を示す「子どもの時間」に対して、客観的時間に依拠する時間である。(図1—人間形成における「子どもの時間」から「大人の時間」への移行のイメージ)のように、幼い子どもが過ごす「子どもの時間」は、就学を経て客観的時間に依拠した「学校の時間」としての「大人の時間」に移行する。それは螺旋的な時間の流れから目的合理的な直線的时间への移行であり、また、「神話的時間」から「近代的時間」への移行でもある⁸。本稿で問う両者の時間の相違とは、こうした前近代的な時間の流れと近代社会が生んだ時間の流れとの相違をも意味するものである。

幼い子どもと保護者が過ごす家庭には、以上のような歴史的相違を示すそれぞれの時間が重層的に流れているということが出来る。それ故に、幼い子どもたちが家庭で保護者と過ごす際、自分を庇護してくれる保護者に空間的親近性を実感すると同時に、他方では「子どもの時間」と「大人の時間」の相違を所以とした差異性をも経験することとなる。

ところで、私的領域としての家庭に対し、公共的領域として幼い子どもたちが身を置く場に、幼稚園や保育所等の教育・保育施設がある。私的領



(図1—人間形成における「子どもの時間」から「大人の時間」への移行のイメージ)

域としての家庭に対して、公共的領域は子どもたちにはある種の緊張感をもたらす場であり、物理的にも心理的にも極めて疎遠な空間であるように思われる。しかしながら一方では、「子どもの時間」を持つ者同士が集まる場として時間的親近性が充溢しているということもできる。したがって、子どもたちにとって教育・保育施設は、私的領域としての家庭では得られにくい一種の親近性を見出すことができる場であるといってもよいのである。

以上のように、「他者」をめぐり、子どもは保護者を中心とした家族を核にしながら同心円的にその範囲を拡大させていく。幼い子どもたちは、親近性を抱く者をより外縁に見出しながら成長していくこととなる。その際、そうした広がり外縁に位置づけられる他者であっても、時間の流れという観点からは「子どもの時間」を同じ地平で共有しうる存在となる場合もある。すなわち、空間的理解という観点からの親近性と時間的理解という観点からの親近性は異なるのである。

それ故に、子どもたちが家庭という私的領域を超えて外縁の空間で「他者との時間」を過ごすことは、同じ地平で「子どもの時間」を共有することのできる存在に気づき、さらに、共に文化形成をなす者としての他者を見出すという点で不可欠な経験であるといえることができる。

(2) 「子どもの時間」を共有する他者

教育・保育施設で出会う他者を含め、子どもたちは、共に「子どもの時間」を生きることのできる多様な他者が不可欠である。「他者との時間」の意義を論究する前提として、それを以下のような3つの他者として捉えるものとする。

まず第一に、「他者」存在が希求する拮抗を内在しうる、同世代の友だちをあげることができる。乳幼児期の子どもは、家庭生活で身近な他者により養育されながら、やがて幼稚園や保育所等の空間において集団生活を体験することになり、そこでは家族とは異なる友だちという存在に出会うこ

ととなる。友だちは、それまで互いに経てきた人生の時間が近似している存在であり、また、幼稚園や保育所等の同じ空間において共に「子どもの時間」を生きることができる者である。しかしながらこうした時間的親近性はあるものの、相互に庇護しあう立場にはないため、喧嘩等に現れるように不断の拮抗が両者の関係性に潜在している。

第二に、「大人の時間」に生きることもでき、一方で子どもと共に「子どもの時間」の流れに生きることを忌避しない大人の存在を指摘することができる。子どもを庇護し、かつ共感を寄せる「他者」としての大人は、近代的時間を超越した存在であるといっても過言ではない。その中心的存在として捉えることができるのは、子どもとは異世代としての老人である。

これに関して、広井良典（1961-）は人間という生物の本質を「子ども—大人—老人」の「三世代構造」を持っていることのうちに認めている。老人は「教」の時間を持つという点では、「学」の時間を持つ子どもとは異なるものの、両者間に「遊」を共通項として見出し、両者の時間の流れの近似性が指摘されている⁹。広井が、人生において「大人の時間」をはさんで子どもの時期と老人の時期が存在することの意義を「人間の創造性や文化の源泉」として捉えている点は興味深い¹⁰。なお、鶴見俊輔（1922-2015）は前近代的時間としての「神話的時間」に生きる子どもに対象世界の本質を直観する力を認めたが¹¹、子どもや老人の「遊」の時間に文化創造の根拠を見出している広井の論を想起させる。

（図2—「子どもの時間」から「大人の時間」を経て「老人の時間」に至る人生の時間）では、人生において「子どもの時間」と「大人の時間」の二項の時間のみが展開されているのではなく、「大人の時間」を超越した者が過ぐす「老人の時間」を示している。「子どもの時間」の「遊」の時間をイメージした螺旋的な時間の流れは同様に「老人の時間」にも流れ、それが子どもと老人の近似性の根拠となっている。一方で老人は「大人の時間」を通り抜けた者として目的合理的な直線的時間を未だ内在させている。こうした複合的な時間故に、老人は、「子どもの時間」を子どもと共有した

「子どもの時間」 → 「大人の時間」 → 「老人の時間」



(図2-「子どもの時間」から「大人の時間」を経て「老人の時間」に至る人生の時間)

り、一方では異世代に対する「教」をなしえたりするのである。

さらに、老人に近似する存在に保育者がいる。前述の「遊」と「教」という老人の子どもに対する関係性は、保育者に不可欠な要素である。したがって、「老人の時間」と同様に「子どもの時間」との近似性を「保育者の時間」にも認めることができる¹²。保育者は保育者としての自らの発達過程において、「子どもの時間」に[・]対峙する段階から「子どもの時間」を[・]共有する段階を経て「子どもの時間」を[・]共に[・]生きる[・]段階に至ることが不可欠であり¹³、「子どもの時間」に近似した時間を過ごすことを職責としなければならぬが、一方で保育者として「大人の時間」に生きる存在でもあるという点で、子どもと同一の地平に立ち続けることは要請されない。

第三には、子どもたちが直接対話しうる存在ではないという点で極めて疎遠な存在ではあるが、子どもと同様に自由なまなざしで世界に関係しようとする芸術家を挙げることができる。ニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche:1844-1900)が芸術家と子どもの時間の近似性を指摘したように、自らの直観を通して自由なまなざしで孤高に生きる芸術家の時間は、近代的時間を超越した者が示す時間である。

元来、子どもが「子どもの時間」を十全に生きることは、自由で豊かな文化創造の端緒となることはすでに述べた通りである。そうした「子どもの時間」において、豊かなまなざしを持つ芸術家によって創造された芸術作品を通じた「他者との時間」は、「子どもの時間」をさらに豊かにする契機となる。こうした時間は、子どもが他者としての孤高の芸術家を仰ぎ見るという姿勢を伴いながら体験される時間である。

4. 自己の時間と他者の時間が交差する瞬間の意義

元来、主体と他者との関係性において拮抗の要素があることはすでに論じた通りである。他者との拮抗は、自己と他者という存在の間にある何等かの齟齬を起因としている。本研究ではそうした齟齬を、各人が持つ時間の流れの相違に認めるものとする。

子どもたちは、「子どもの時間」の流れの中で共に生きる存在であるとはいっても、各人は他者と全く一致した時間を生きているわけではない。自己を取り巻くあらゆる存在はそれぞれ異文化に生きる者であり、それは各人が持つ時間性の相違を根拠としている¹⁴。こうした時間的相違を介在させながらも、子どもが他者と共にあろうとする時、自他の時間の交差の瞬間が体験されるならば、そこには文化の融合や重層の深化がもたらされ、ひいては豊かな文化創造の端緒となるであろう。

「子どもの時間」において、自他の時間が交差する瞬間とはいかなるものであるのだろうか。また、その瞬間にはいかなる意義があるのだろうか。

(1) 遊戯における偶然という瞬間 —同じ地平に生きる他者との時間—

① 友だちとの拮抗と創造

「子どもの時間」の流れを共に過ごす存在である友だちは、互いに異文化の存在である。両者間に見られる異文化性の根拠は、個々の子どもの身体性及び精神性の基盤となっている「家」の時間性に基づいている。「家」は子どもたちが最初に依拠する空間であるが、そこに流れる時間は極めて主観的であり、住人としての家族が築き上げてきた歴史性を内包させている¹⁵。それ故、「家」が持つ主観的時間はそれぞれ独自のものであるから、そこに住まう子どもたちは「家」で形成された個別の文化を携えて公共的領域に日々出かけていく。

なお、「家」は、客観的時間に基づく公共的領域から帰宅した住人を保護及び庇護する。またその一方では、住人を公共的領域に送り出す力動性をも持っている。そうした力動性により公共的領域に日々子どもたちは出か

け、そこでしばしば過ごすこととなる。子どもたちは公共的領域としての幼稚園や保育所等において、家族によって形成された個々の主観的時間を携えつつ、一方では、「大人の時間」に生きる保護者とは共有しにくい「子どもの時間」を同年齢の友だちと過ごすことになる。こうして、幼い子どもの多くは家庭生活を基盤としながら、一方では、「家」という庇護的な空間から放出されて園生活を日常的になすのであるが、友だちとの関係性において、ある種の緊張感と親和性を融合させた両義的時間を過ごすこととなる。

偶然にも園舎や園庭という空間を共有することを余儀なくされ、共に生活することになった同年齢の子どもたちはひとくくりに「友だち」と称される。物理的にそこに集まることになった者同士であり、子どもたち自身の嗜好や意志とは無関係に人間関係の構築が要請される。友だちは相互の相違を容赦なく発揮し、時には自我を徹頭徹尾周囲の者に示そうとする。そうした点において、彼らは互いに迎合しない存在ということができるのであり、それ故に不断の緊張感が潜在しているのである。友だち同士の拮抗は、しばしば喧嘩という状況として表出している。

しかしながら、喧嘩はその後の両者の関係の修復を内包しているということもでき、したがって両者の関係性は可塑的である。それは、「子どもの時間」が創造と破壊の繰り返しである遊戯の原理に基づいたものだからであり、遊戯を介在している友だちという人間関係にも重なることを所以としている。

こうした可塑性に基づいた人間関係のうちで、子どもたちは各自が携えている時間の流れを示すのであるが、人間関係の可塑性を所以として、各自の時間は分離したままではなく、やがて交差に至るのである。そうした時間の交差が増加すればするほど、いみじくも倉橋惣三が、「友だちどうしは、ものの見方、感じ方が同じである」¹⁶と、複数の子どもたちが「同じ心を添へあふ」ことによって彼らの興味の強化につながることを示唆しているように、子ども間で豊かな文化が形成されるのである。

②遊戯における偶然性

ところで、こうした友だちと共に過ごす「子どもの時間」とは遊戯の充溢した時間である¹⁷。遊戯とは身体全体を通してなされるものであるが、友だちとの「他者との時間」はすなわち間身体性の時間といえるのである。

そして、そうした遊戯がなされる過程で子どもたちはある瞬間に邂逅する。それは、事前に予想しえない偶然という瞬間であり、遊戯のうちに無数に存在している。「子どもの時間」の流れが無数の螺旋的形狀を内在させたものであることをすでに拙稿で指摘しているように¹⁸、遊戯とは非連続性を伴ったものである。これに関して、遊戯は偶然との戯れであると指摘したボルノーは、人は遊戯において意表（Überraschung）をつかれて思いがけぬことが起こる可能性と遊ぶとさえいっているのである¹⁹。遊戯の楽しさの根拠となっているとも思われる偶然性の表出を遊戯の過程において遊戯者同士が共有する時、遊戯に潜在する拮抗はいったん克服され、他者との創造が促進されるのである。

「砂場のトンネルづくりで両者から掘りすすみやがて穴が貫通した折の互いの手の感触を知る瞬間」、「馬跳びをする中で、飛ぶ者と土台になる者との呼吸の一致を実感する瞬間」、「身体接触を通した遊びにおいてふと他者の匂いに気づく瞬間」等、多様な瞬間が遊戯者である子どもたちに身体的な気づきとして訪れる。客観的時間に依拠しない遊戯の充溢した「子どもの時間」では、「大人の時間」におけるロゴス中心主義からは導き出されない他者との身体性の交差を契機とした時間の共有の瞬間を体得しうる。

なお、それは自己とは異なる他者の生を直接的に実感する瞬間であり、同時に自らの紛れもない生を感じる瞬間ということもできる。遊戯において身体知として他者と共に生きる自己が知られるのであり、「子どもの時間」において「他者との時間」を生きることの意義がここに見出されるのである。

(2) 戸惑いを共有する瞬間 ―自分を庇護してくれる他者との時間―

前述のように、子どもにとって老人と保育者は「子どもの時間」を共有しうる存在として捉えることができる。ただし、両者は「大人の時間」に生きる存在でもあり、そうした点において子どもと徹頭徹尾同様の「子どもの時間」を生きる存在ではないことを付言しておきたい。

さて、こうした老人や保育者という他者と過ごす時間は、子どもにとって庇護される時間として心地よいものである。老人や保育者は「遊」という共通性を示す存在であり、また、未熟な自己に対して「教」を付与する存在でもある。そうした両義性を持つ存在は子どもにとって安心をもたらし、かつ、揺るぎのない強さを示す存在である。しかしながら、そうした強さが時として誠実さを所以とした弱さに転化する瞬間がある。

これに関連して、絵本作家のいとうひろしによる回想を参照したい²⁰。いとうの代表作に『だいじょうぶだいじょうぶ』²¹がある。同作品では、祖父と孫が共に過ごす時間において、様々な不安や局面に対する孫に「だいじょうぶ、だいじょうぶ」と祖父が言葉をかける場面が連続して登場する。いとうによれば、祖父と孫の両者が「ゆっくり、のんびり」と時間を共有することが人生の楽しさをもたらすという。一見すると近代的時間にはじかれた老人と子どもが気ままに両者の時間性を融合させているように見えるのであるが、やがて「だいじょうぶ、だいじょうぶ」という言葉は成長した孫からさらに年老いていく祖父に向けられるようになり、それは両者を深層でつなぐ多くの瞬間を表現した言葉として理解されるのである。

両者を深層でつなぐ瞬間をめぐり、いとうの祖母との思い出を更に追っていきたい。

いとうは共働きの両親にかわり、主に同居の祖母の世話によって成長した。小学校1年生の際の祖父の死をめぐり、人の死や存在の消滅を自身の戸惑いとして実感したという。それは「いつか自分も死ぬ、周囲の皆も死ぬ」という恐怖として感じられたのであるが、従来からの相談相手である祖母への次のような質問として体現化された。「おじいちゃん死んじゃった

よね」、「みんな死ぬんだよね。死んだらどうなるんだろうね」という問いである。この問いに対する祖母の反応は「ん？」というものであったという。それは、疑問の表情を伴った間であったのであるが、いとうはこの一瞬の「ん？」という間が自分自身の救いとなったことを指摘している。祖母は直後に、「んー、死んだことないからわからない」とも述べ、大人にとっても「わからないもの」があることを孫の前で決して隠蔽しようとしないう姿が明らかになったのである。

この間は、いとうが抱いていた死への恐怖を軽減したというが、これまで孫にとって様々な指南者であった祖母の、実は同じ地平に立つ者としての戸惑いの間であった。もっとも、両者間にそれまで流れていた時間は、「子どもの時間」を共に生きようとする祖母と孫の時間ではあったものの、時には並行した二者の時間でもあったであろう。しかしながら、この「ん？」という間は、同様に答えの出ないものを共有しうる両者の交差を示す瞬間であったのである。

この瞬間は、「おばあちゃんでもわからない」という同じ地平に立つ者としての戸惑いを表した間であり、それは祖母も弱さを持っていること的一面を示しているものの、いとうにとっては「こちらの疑問や不安や恐怖を正当なものとして受け止めてくれた」という人間の誠実性を根拠とした瞬間であった。すなわち、こうした瞬間は、大人や子どもという二者を超越した生そのものの時間として示されたのである。「そうだよ、ひろしおもしろいことを考えているんだね。(中略)でも誰もわからないんだよ。(中略)不思議、怖いと思うのはまっとうなことなんだよ」という祖母の言葉はいとうを納得させた。いとうは次のように続ける。「そこで安心した。自分が今いることのおもしろさ、なんの理由もなく今ここにいる、決して安定したものではなくて、もしかしたら明日いなくなるかもしれない。その出発点がそこだった」というのである。こうしたいとうの言表は、祖母と孫、大人と子ども、老人と子ども等を包括した生そのもののあり方を、私たちが人生の時間において探究することの意義を示すものである。

(3) 畏敬の念を抱くという瞬間 —仰ぎ見る他者との時間—

人は時に、優れた文化の創造を担う歴史的偉大さを看過することがある。それは文化の停滞と貧困化を引き起こす危険性を秘めている。時に衝撃性をもたらす偉大な者との邂逅を引き受ける力を子どもたちに醸成しておくことは、文化を担う彼らにとって不可欠である。「子どもの時間」において出会うべき他者として、仰ぎ見ることによって認められる至高な他者との時間が必要である。

そうした他者として幼い子どもたちに邂逅させたい他者は芸術家である。「子どもの時間」において子どもが直観を通して世界に関係するように、芸術家もまたロゴスを超えて世界を表現する。その強い個性は極めて自由なあり方を子どもたちに示すことができる。実体としての他者ではないとはいえ、美術作品は幼い自分たちにも毅然としており、独自の自由な表現をこちらに叩き付けるかのようである。

幼い子どもたちもまた大人と同様に、美術作品の鑑賞や模写等を通して、芸術家との時間を過ごすことができる。実際に美術館において、幼い子どもたちに自分が気に入った作品模写をする機会を提供すると、その至高性に容易には到達することができない偉大な他者との時間において、彼らは真摯に作品と向き合うことができる²²。美術作品の模写を体験する子どもたちは、芸術家との一対一の関係性において、芸術家の強い個性との闘いを余儀なくされ、自らもまた孤独となって黙々と模写を進めていく。幼い子どもたちの非ロゴス性は、美術作品を通して非ロゴス的に表現しようとする芸術家に通底しているのである。

こうした模写における沈黙の永続性に関して、ボルノーが「人間は畏敬に現前して黙り込む」²³と述べ、畏敬が人間を沈黙へと強要することを指摘していることを想起したい。ボルノーが述べる²⁴ように、作家の追体験という模写の過程で畏敬すべきものに直面した結果として、子どもたちが沈黙するといっても過言ではないのである。まさに非ロゴス性の共有において子どもたちは芸術家に対する畏敬の念を生起させるといってもいいだろう

う。直観を通して世界に関係しようとする子どもと直観をあまねきにわたり駆使する芸術家が、こうした非ロゴス的な沈黙において結びつきやすい関係性にあるということが言えるであろう。

なお、沈黙は、「畏敬すべきものと出会う際に内的な深みからわき上がる」²⁵という時間の非連続性を伴っていることをボルノーは指摘する。子どもが芸術家に対して畏敬の念を抱く瞬間を予測することはできないが、じっくりと対象世界に関わる「子どもの時間」が子どもたちに保障されない限り、そうした畏敬の瞬間は訪れることがないということは明白である。

5. 結びにかえて

子どもたちが「子どもの時間」を過ごす意義は、彼らの独自のまなごしをさらに豊かにし、また、文化の担い手として豊かに文化を創造していくための端緒を「子どもの時間」がもたらすことであるという立場を起点として筆者の一連の研究は進められてきた。しかしながらそれにとどまらない「子どもの時間」の理解の深化の必要性が、本研究を契機として知られた。すなわち、子ども時代の「畏敬」経験についてである。子どもたちが子ども時代に多くの他者に出会う際、同じ地平で世界に関わろうとする友だちという存在と様々な偶然の瞬間を共有し、さらに、自分を庇護する老人や保育者等と戸惑いの瞬間を共有することを通して、他者の生に対する畏敬の念を抱く瞬間が訪れる。すなわち、こうした「畏敬」経験は、幼い子どもたちが多様な他者と「子どもの時間」を共に過ごすことにより得られるものであるということが明らかとなったのである。換言すれば、子ども時代における「他者との時間」は、自他の生を根本的に問う契機をもたらすものと考えられるのである。

畏敬をもたらす沈黙は、何らかの理由なき「気後れ」²⁶が惹起するというボルノーの指摘は興味深い。こうした沈黙の瞬間とは、前述のいとうひろしの祖母を想起するならば、答えが見出せないものに現前した者の生が揺さぶりをかけられた戸惑いの瞬間に近似している。そうした瞬間は、自分自

身の生を自覚し、また、対象世界への生に対する畏敬の念を抱くという経験を子どもたちにももたらしうるものであるということが考えられよう。

ボルノーは、第二次世界大戦中に人間の生と尊厳が弱体化しているところで中心的な倫理問題として生への畏敬を扱おうとした²⁷が、他者の生のあり方を真摯に問おうとせず、人間の生の尊厳に無頓着となりつつある現代社会においては、この問題は従来以上に問われなければならないものである。また、「他者との時間」において、他者の生に対して子どもたちが抱く畏敬の念は、生の充溢した文化創造の基盤となるものである。こうして、他者と拮抗し、戸惑いをも共有しうる他者経験のあり方を「畏敬」を鍵概念としながら今後探究することの必要性を感じるのである。それは、「子どもの時間」や「大人の時間」、あるいは「老人の時間」及び「保育者の時間」という諸時間を越えた生そのものの時間を問う試みの中で探究されなければならないであろう。

さて、ボルノーは無邪気に自己の世界に入り込んで日々を過ごしている子どもは、畏敬の沈黙を知らないと述べる²⁸が果たしてそうであろうか。幼い子どもも「他者との時間」において生の深遠さに出会う時、孤独な者となり沈黙しうるであろう。「子どもの時間」に潜在する孤独性は彼らを非口ゴスの世界に導くからである。大人は、そうした子どもの姿を看過することなく、彼らの自由と孤独を引き受けることを躊躇してはならないのである。その際、大人もまた答えのないものを共に求めようとする誠実な他者として子どもと共にあろうとしなければならないのである。

註

- 1 有馬知江美「人間形成における子どもが過ごす時間の意義について」『関東教育学会紀要』第30号 関東教育学会 2003年。
- 2 有馬知江美「哲学教育に関する考察(XII)―子どもの孤独の時間と自由の探求について―」『作新学院大学女子短期大学部紀要』第31号 2008年。
- 3 E. ボールディング (Elise Boulding 1920-2010) による『子どもが孤独でいる時間』(松岡享子訳 こぐま社 1988年。)を参考にすることができる。
- 4 Otto Friedrich Bollnow: *Existenzphilosophie und Pädagogik*. Kohlhammer, Stuttgart. 1983. S.98.
- 5 有馬前掲論文「哲学教育に関する考察(XII)―子どもの孤独の時間と自由の探求について―」
- 6 齋藤昭『教育的存在論の探究』世界思想社 1999年 159頁以下。
- 7 ヤスバース, K. 草薙正夫・信太正三訳『実存開明』創文社 1964年 77頁。
- 8 拙稿において、両者の時間の相違についてすでに論じている。有馬前掲論文「人間形成における子どもが過ごす時間の意義について」2-5頁。
- 9 広井良典『死生観を問い直す』ちくま新書 2001年 72頁。
- 10 同書 76頁。
- 11 鶴見俊輔『神話的時間』熊本子どもの本の研究会 1995年。
- 12 有馬知江美「保育者が認識すべき『子どもの時間』の多角的考察」『白鷗大学論集』第26巻第2号 2012年 222頁以下。
- 13 同論文 232-233頁。
- 14 青木保『異文化理解』岩波新書 2001年 67頁以下。
- 15 有馬知江美「哲学教育に関する考察(XIII)―『家屋』と『学校』の非連続的な関係性について―」『作新学院大学女子短期大学部紀要』第32号 2009年 86頁。
- 16 倉橋惣三「教育講話 友だちどうし(幼児の母)」『幼児の教育』Vol.42 no.6 日本幼稚園協会 1942年 44-45頁。
- 17 有馬前掲論文「人間形成における子どもが過ごす時間の意義について」2頁以下。
- 18 同論文 5頁。
- 19 Otto Friedrich Bollnow : *Das Verhältnis zur Zeit, Ein Beitrag zur pädagogischen Anthropologie*. ANTHROPOLOGIE UND ERZIEHUNG Band 29, Herausgegeben von OTTO FRIEDRICH BOLLNOW und ANDREAS FLITNER in Verbindung mit Hans Scheuerl, Quelle & Meyer Verlag, Heidelberg, 1972, S.30. (邦訳: O. F. ボルノー 森田孝訳『時へのかかわり 時間の人間学的考察』川島書店 1975年。)
- 20 NHKラジオ放送: ラジオ深夜便 2016年1月13日(木) 明日へのことば「孫に届くことば『だいたいじょうぶ』」いとうひろし(絵本作家)。このラジオ放送の中で、いとうひろしが祖母との思い出を語っている。
- 21 いとうひろし作・絵『だいたいじょうぶだいたいじょうぶ』講談社 1995年。
- 22 筆者はこれまでに幼児を対象とした美術作品の鑑賞と模写のプログラムを実施している。直近の実践としては2016年2月17日に宇都宮美術館(栃木県)において実施した保育園年長児を対象とした絵画模写実践がある。
- 23 Otto Friedrich Bollnow : *Die Ehrfurcht. Wesen und Wandel der Tugenden*. OTTO FRIEDRICH BOLLNOW SCHRIFTEN Band 2, Studienausgabe in 12 Bänden, Herausgegeben von Ursula

子ども時代の「他者との時間」に関する人間学的考察

Boelhauve, Gudrun Kühne-Bertram, Hans-Ulrich Lessing und Frithjof Rodi. Königshausen & Neumann, Würzburg 2009, S.46. (邦訳：O. F. ボルノー 岡本英明訳『畏敬』玉川大学出版部 2011年。)

24 *Ibid.*, S.46.

25 *Ibid.*, S.46.

26 *Ibid.*, S.48.

27 O. F. ボルノー 岡本英明訳『畏敬』玉川大学出版部 2011年 214頁。

28 a.a.O., Otto Friedrich Bollnow : *Die Ehrfurcht. Wesen und Wandel der Tugenden.* S.47.